

# デンマークの森のようちえんの特徴と今日的意義 ——2022年のフィールドワークを手がかりに——

山口 美和\*・伏木 久始\*\*・坂田 哲人\*\*\*

(令和5年1月31日受付；令和5年4月17日受理)

## 要 旨

本研究の目的は、デンマークにおける森のようちえんの特徴を概観するとともに、幼児期の子どもにとって、森のようちえんがどのような役割を果たすのかを考察することである。そのために、2022年8月から9月にかけて、コペンハーゲン大学内に設置されている「子どもと自然センター」でのインタビュー調査と、デンマーク国内のタイプの異なる4つの森のようちえんの視察調査を行った。「子どもと自然センター」の説明によれば、デンマーク国内の子どもが屋外で過ごす時間は3-3.5時間と比較的長時間ではあるものの、屋外でどのような体験を行っているかという自然体験の「質」については、十分に吟味されていないことが課題として指摘された。また、タイプの異なる森のようちえんの参観を通して、デンマークの森のようちえんには多様な形態があることを具体的に明らかにした。たとえば、自然豊かな場所に設けられた園舎に隣接ないしは徒歩圏内に位置する森において、ほぼ1日を過ごすタイプの園がある一方で、都市の市街地にある園舎から距離の離れた森まで、バスで時間をかけて出張するタイプの園もある。森で過ごすという条件は同じでも、それぞれの園の方針の違いによって、子どもたちの森の中での過ごし方・遊び方が違ってくることを確認できた。本調査研究により、日本の自然保育が量的拡大から質的充実に向かう際の留意点が示唆された。

## KEY WORDS

森のようちえん デンマーク 自然体験 自由保育 保育者養成

## 1. はじめに

わが国の幼児教育において、わが子を「森のようちえん」<sup>1)</sup>へ通わせようとする保護者のニーズは決して多数派であったとは言えない。むしろ、選択の余地のある家庭の保護者は、就学前の段階であっても英会話や楽器演奏の時間を取り入れていたり、高度な体操のワザの修得をウリにしていたり、園内に子どもが利用するICT機器を備えていたりする園へ子どもを入园させたいという希望が優勢であったといえよう。また、山口(2016)<sup>1)</sup>が指摘するように、就学前の保育・幼児教育施設に関する法令が森のようちえんを想定していなかったことから、園舎や職員配置などが国の基準を満たさず、行政の支援を十分に受けられなかったことも、森のようちえんの普及を妨げていたという面もある。

そうした中で、幼児期の子どもたちの心身ともに健やかな育ちのためには、豊かな自然体験ができる環境を構成することが望ましいという理念を共有する関係者を中心に、自然保育の実践への関心が高まり広がっていった。日本における森のようちえんの動きは1980年代に遡ることができるが、2000年以降になるとその数が急速に増加している。その後、長野県の「信州型自然保育認定制度」や鳥取県の「とっとり森・里山等自然保育認証制度」が創設されるなど、こうした自然保育への注目を後押しする自治体も現れ、自然環境を存分に生かした保育に挑む施設が徐々に広がりを見せる中で、自然環境・地域資源を有効活用する保育・幼児教育を専門的に研究する日本自然保育学会が設立(2015)された。それ以降、わが国の自然保育は国際的な視野でも盛んに論じられており(杉山浩之:2015<sup>2)</sup>、松田こずえ:2019<sup>3)</sup>、光橋翠:2020<sup>4)</sup>、柴田卓・柴田千賀子:2022<sup>5)</sup>など)、自然保育を牽引する森のようちえんの実践課題は、取り組む園を広く普及させていく量的拡大から、活動の理念や実際の保育内容を吟味する質保証の段階へと移行しつつある。

そこで、森のようちえんの発祥の地とされるデンマークの森のようちえんの現在の概況について、実地視察を通して情報収集するとともに、わが国の自然保育の質保証に向けての有効な示唆を得る目的で、2022年8月30日より9月2日までの4日間にデンマーク国内の4種類4箇所の森のようちえんへのフィールドワークを行った。また、デンマークの森のようちえんをサポートする役割を担っている「子どもと自然センター」(コペンハーゲン大学内)を訪

\*学校教育学系 \*\*信州大学教育学部 \*\*\*大妻女子大学家政学部

問し、センターの研究者3名との意見交換の機会を設けた。デンマークの森のようちえんに関しては、日本国内では一般的に森の中での自由保育のイメージが先行して、その多様性は理解されているとはいいがたいが、本調査を通してデンマークの森のようちえんの全体像を明らかにするとともに、その今日的な意義に言及する。

なお、デンマークでは就学前の子どもの施設を所管する官庁が「社会省」から「子ども・教育省」（2011年発足）へ移っているものの、保育園と幼稚園に分けるといふ区別はない。ただし、0歳から3歳頃までの子どもが通う「Vuggestue（ヴォクステウ）」とそれ以降6歳までの子どもが通う「Børnehave（バーネヘーブ）」は別の場所に設置されており、就学前教育は全て有料である。また3歳以下の子どもたちの中には「Dagpleje（ダオプライ）」と呼ばれる家庭保育でケアされるケースもあり、近年ではいわゆる「保育ママ」を活用してVuggestueやDagplejeへ入園させない親も増えている。さらに、都市部ではVuggestueとBørnehaveを合体させた異年齢統合型施設もできていて、3歳を境にして園を移らなくてもよいことや、園内でVuggestueからBørnehaveへの引継ぎや慣らし保育をしてもらえるメリットなどから人気も高まっている。こうした日本の就学前施設の種別とは異なるデンマークの就学前事情を踏まえて、本稿では「森のようちえん」とひらがなで表記する。

## 2. 調査の概要

### 2. 1 調査日程

2022年8月30日（火）より9月2日（金）までの4日間、以下のスケジュールで調査を行った。

#### 【第1日目】（8/30）

9:00-11:00 ①ソーリョー森のようちえん（Sorø Skovbørnehave）：園長 ミア・フリーマン

13:00-15:00 ②子どもと自然センター（Center for Børn og Natur）：センター長 ソーアン・プラストホルム

#### 【第2日目】（8/31）

9:00-12:00 子どもの島 ボンサイ（Børneøen Bonsai）：園長（法人代表）リッケ・ローゼングレン

#### 【第3日目】（9/1）

8:30 幼児教育施設 マリエングール（Børneinstitution Mariendal）：園長 エヴァ・ヤーネ

8:45 園バス同乗 同園が使用している自然フィールドへ

#### 【第4日目】（9/2）

10:00-14:00 森と音楽のようちえん 松ぼっくり（Skov og musikbørnehaven Koglerne）：園長 ラース・リンクヴィスト・マッセン

### 2. 2 調査方法

3名の調査メンバー（山口・伏木・坂田）による実地視察と園長への聴き取りを、デンマーク語通訳者を介して行った。参観中にも保育士の了解が得られる範囲内で随時インタビューを行っている。詳細は次節に整理した。

## 3. 調査結果

### 3. 1 ソーリョー森のようちえん

#### 3. 1. 1 園の概要

- ・所在地 : Skolevej 1A, 4180 Sorø, Denmark
- ・地域の特徴 : コペンハーゲン中心部から電車で30分、駅から徒歩10分程度
- ・園の設立年 : 1991年保護者立として設立
- ・園児数 : 3歳から6歳までの子ども60名
- ・学級数 : 異年齢混合で3クラスあり、各学級に常勤の担任を3名ずつ配置
- ・職員数 : 計10名 管理職（園長）含む 職員9名のうち有資格者6名、保育補助3名
- ・保育時間 : 月曜日から金曜日、午前7時から午後4時30分まで（ただし金曜日は4時まで）
- ・月額保育料 : 1,990デンマーククローナ
- ・訪問日時 : 2022年8月30日（火）10:00~11:30
- ・ホームページ : <https://www.skovbh.dk/>

### 3. 1. 2 実践の概要, 子どもたちの遊びの様子

同園は、園の敷地とは別にSorø Akademiが所有する森の敷地を借り受けており（月額6,000デンマーククローナ）、訪問した日は、子どもおよそ20名、保育者3名で、森の中へ出かけた。園舎から歩くこと15分くらいの距離に広場があり、そこで自由な遊びを展開していた。道中は、保育者が荷物を積んだリアカーを引いているが、子どもたちが手伝いたいという場合には、子どもが参加することもある。荷物の内訳は、子どものリュック（食事や水筒などが入っている）、玩具の他、森で使う道具などである。子どもの持ち物以外はあらかじめ用意されているようであり、特定の目的を持ったものがその日ごとに準備されるというよりも、毎回同様の荷物を積んで森まで運んでいるケースが一般的であるようだ。

移動中におけるルールが共有されているようで、例えば保育者よりも（はるかに）前を行かない、後も同様であるという様子が見られた（ルールを大きく逸脱する場合には、その子に声掛けをしていた）。

広場は、木々に囲まれていながらも、周囲100メートルくらいは見通しが利くようになっていて、その範囲で子どもたちが自由に遊んでいた。たとえば、木登りをして遊ぶ子どもたち（写真1）、地面の凹凸部分を使って遊ぶ子どもたち、保育者が設置したハンモックを使って遊ぶ子どもたち、保育者が木に巻き付けて準備したロープを使って遊ぶ子どもたち、園から持ち込んだ玩具を使ってごっこ遊びをする子どもたちがいた。さらに、ナイフを使って木の枝を材料とする製作活動に取り組む3歳児もいた。

保育者は、時折子どもたちの遊びの中に入ったり、子どもたちと一緒に食事をとったりしながら、簡単な環境整備をしていた。参観した場面では、保育者が子どもたちに遊んでよいエリアを指定することはなかったが、子どもたちが遠くに離れていく様子はなかったことから、どこまで遊び場を広げてよいかという約束事が共有されていたと考えられる。また、園舎に戻る途中で、他のクラスが遊んでいる別の広場を通りがかかったが、クラスごとに遊ぶ場所を決めている様子もうかがえた。

保育時間の中で子どもたちは毎日3回の食事をとるが、3食分とも家庭で用意することになる。森へ出かけた日には到着後すぐに第1回目の食事の時間（10時半頃）になり、12時半頃に森の中で第2回目の食事を取り、園舎に戻ってから15時頃に3回目の食事をとっている。子どもたちに持たせる食事については、1回目と2回目の食事は簡単に食べられるようなものをラッピングしてくるなど指示されている。

また、天候にかかわらず森へ出かけて遊ぶことも多いため、服装や持ち物についても、保護者へ細かく説明して協力を求めていることは、園のホームページ情報からも理解できる。

### 3. 1. 3 その他の特徴

「森のようちえん」としての認証を受けているとのことで、園庭に認証旗が掲げてあった（写真2）。森のようちえんの認証については、野外活動協議会（Friluftsrådet）<sup>2)</sup>が運営する幼児教育・保育施設向けの認証団体であるグリーンスプラウト（Grønne Spiers）<sup>3)</sup>緑の新芽の意）が、独自の基準に従って認証を行い、認証の印として旗（サステナビリティフラッグ）を授与している。幼児教育施設の認証基準は、①毎日自然の中で活動し、毎週自然フィールドで遠足やハイキングなどを行うこと、②自然活動に関する年間指導計画を作成すること、③施設に所属する2名以上の保育士がグリーンスプラウトの会議やコースに参加すること、④園の活動について報告を行い、広報活動を行うこと の4点である。

入園に際しては、ウェイティングリストがあり、リストに登録するために、「STØTTEFORENINGEN」（PTAのような組織と思われる）に登録する必要がある。登録料は1家庭あたり195デンマーククローナ（約4,000円）である。3歳になる月から入園可能で、きょうだい割引がある。

最初の数日に保育体験ができるようになっており、また新しく入園する家庭には、すでに入園の家庭の中からメンターがアレンジされ、様々な相談に乗ってくれる。

【写真1 木登りをして遊ぶ子ども】



【写真2 グリーンスプラウトの認証旗（サステナビリティフラッグ）】





### 3. 2 子どもの島BONSAIようちえん

#### 3. 2. 1 園の概要

- 所在地 : Jægersborg Allé 2 A 2920 Charlottenlund, Denmark
- 地域の特徴 : コペンハーゲン中心部から電車で30分, 駅から徒歩10分程度
- 園の設立年 : 2000年にコペンハーゲン市内で0-3歳の乳児保育施設 (Vuggestue) として開園。2002年より, 3歳以上の幼児教育 (Børnehave) を開始。
- 園児数 : 3歳以上の子ども (Børnehave) 約90名 (うち60名はコペンハーゲン市内から通園)  
3歳未満の子ども (Vuggestue) 約30名
- 学級数 : 3歳以上4クラス, 3歳未満2クラス, 異年齢で編成し, 各年齢が同数になるように分割している。
- 職員数 : 計35名 (3歳未満クラスを含める)
- 保育時間 : 午前6時25分 (7時30分まではほとんど登園なし) から午後4時まで  
コペンハーゲン市内からのバスの送迎あり (市内8時5分発園50分着, 帰りは園を14時40分発)
- 月額保育料 : 3歳以上の子ども3,350デンマーククローナ 3歳未満4,140デンマーククローナ
- 訪問日時 : 2022年8月31日 (水) 10:00~11:30
- ホームページ : <https://rs-bonsai.dk/>

#### 3. 2. 2 実践の概要, 子どもたちの遊びの様子

園舎, 加えて隣接する園庭があり, 簡単な柵で囲われた敷地となっている。囲いの外側にはすぐに森が広がっており, この森を利用した自然保育が実践されている。この森で保育を行う場合もあれば, 歩いて5分から10分圏内にある

【写真3 BONSAIの室内の様子】



ビーチや砦の跡地などに出かけることもある。訪問した日は, 園舎内, 園庭並びに隣接の森を順次参観した。同園は, シュタイナー教育に基づいた保育実践であると紹介されており, 園舎の中の内容や備品については, シュタイナー教育の特徴であるような環境構成が色濃く出ている (写真3)。保育実践においては「リズム」を大切にすると紹介されたが, いわゆる「生活リズム」を整えるというニュアンスに近いものと理解した。園長への聞き取りによると, シュタイナー教育の方針に従って, おおまかな1週間のスケジュールが決まっており, 月曜日は庭で植物の手入れをしたり焚き火で調理をしたりする日, 火曜日は長距離の散歩の日, 水曜日は園内で絵を描いたり機織りや縫い物をする日, 木曜日はパンを焼く日, 金曜日は海での活動を行う日だということである。

森の中では, 保育者が一定の範囲を区切り, その中で遊ぶように約束している。範囲の境界にあたる場所には, クラスの色を表す旗 (高さ50cmくらい) が立てられているので, その旗を超えて外には出ないということになる。旗で囲われた範囲の広さは, おおむね「園庭」として保育者が視認できる範囲 (距離) である (もちろん, 木の陰など死角は多く存在している)。旗の中では, 自由な遊び, 特に運動遊び (おにごっこ, ボール遊び) が主に行われていたが, その一方で, シュタイナー教育の方針とかかわって絵を描く時間 (水彩画) を積極的に設けているコーナーもあった (写真4)。

夏の期間中は, 基本的には毎日園舎の外ですぐすが, 冬になると園舎内で過ごす機会も多くなる。ほかに一日の決められたルーティーンとしては, 朝の集まり (9時半ごろ, 歌をうたう), ランチ (11時30分ごろ, 園の方針でグルテンフリーの給食が提供される), 午後の集まり (13時頃, 素話を主に), 帰りの会 (14時, 歌をうたう) などである。

【写真4 屋外の遊び場】



#### 3. 2. 3 その他の特徴

当該ようちえんは, BONSAI Instituteという法人によって運営されている。この法人では, 現在このようちえんを含めて3拠点5施設を運営しており (Charlottenlundに3歳以上の幼児対象施設 (Børnehave) と0~3歳の乳児対象施設 (Vuggestue), Amagerに乳児対象施設 (Vuggestue), ESPERGÆRDEに幼児対象施設 (Børnehave) と乳児対象施設 (Vuggestue)), 加えて, 近々拠点がさらに1つ増える予定である。法人本部は今回訪問した園の敷地

内にある。保育実践の内容や考え方などを記した書籍を執筆販売し、あるいは講演活動を行うなど対外的な活動も積極的に行っているようである。

職員の採用にあたっては、シュタイナー教育の研修を受けた有資格者を採用し、年に1回はブラッシュアップ研修などを行って保育の質を高めているとのことであった。就学前の準備として、入学の半年前から5歳児のみ、2週間に一度のペースで演劇や創作などの協働的活動をカリキュラムに取り入れている。

### 3. 3 幼児教育施設マリエンダール

#### 3. 3. 1 園の概要

- 所在地 : Dronning Olgas Vej 6 , 2000 Frederiksberg, Denmark
- 地域の特徴 : フレデリクスベア市内 (コペンハーゲン市の中にある独立した自治体)
- 園の設立年 : 2002年 (森のようちえんとしての活動は2004年から開始)
- 園児数 : 3歳から6歳までの子ども55名, 3歳未満の乳児25名
- 学級数 : 4クラス (幼児2クラス, 乳児2クラス)  
幼児クラスは2週間ごとに交代で郊外の自然フィールドでの活動を行う。
- 職員数 : 幼児クラスでは各学級に3人の有資格者 (Pedagog) + ヘルパー2名保育補助 (Pedagog Assistent) を配置して25名の子どもの保育を行っているが, 乳児クラスを合わせた職員の総数は不明。
- 保育時間 : 午前8時ごろから午後4時ごろまで
- 月額保育料 : 不明
- 訪問日時 : 2022年9月1日 (木) 8:30~15:30
- ホームページ : <https://frb-mariendal.aula.dk/>

#### 3. 3. 2 実践の概要

市の中心部にある都市型のようちえんである。市内にある園舎は2階建てで、乳児クラスの保育室2室と、幼児クラスの保育室2室及びアトリエスペースなどがある。園舎横にも砂場や固定遊具を配した小さな園庭があり、登園した子どもから園庭で自由に遊ぶ姿がみられる。3~6歳の幼児クラスの子どもたちは、約25名の異年齢で構成される2つのクラス(チーム)に分けられている。1クラスは園舎でレジョ・エミリア型の幼児教育を受け、1クラスは郊外の森での活動を行うカリキュラムとなっており、2週間ごとに交代する。

森での活動を行うクラスは、朝8時45分にバスで園舎を出発し、25分ほどの場所にある自然体験フィールドへ向かう。フィールドにはフレデリクスベア市が借り上げている2階建ての建物があり、市内の公立園6園で、施設とその前に広がる屋外フィールドを共同利用している。施設内には、各園がそれぞれ専用に使用できる保育室が設置されており、子どもたちはそこで屋外活動の前後に絵本を読んだり、昼食やおやつを食べたりできる。施設前の屋外フィールドには、柵で囲われた比較的広い庭があり、砂場や固定遊具が設置され、砂遊びの道具なども用意されている。柵を出た場所には芝生が広がった広い自然フィールドがあり、さらに5分ほど歩いた場所には森がある。訪問した日は、マリエンダール以外にもう1園がフィールドを利用しており、柵内の庭では2つの園の子どもたちが混じり合って遊ぶ様子が見られた。

この日は10時ごろになると、保育者の一人が年中(4歳児)の子ども8名を連れて、森へ移動した。森は、今回の視察で見た中では最も起伏のある地形で、斜面に囲まれた窪地のような場所に、子どもたちが輪になって座れるよう丸太で作った椅子が置かれている。保育者は子どもたちとともに腰掛け、これから行う「ネイチャービンゴ」の説明をする(写真5)。「ネイチャービンゴ」はネイチャーゲームの一種で、そのフィールドで見つけることのできる自然素材を探すゲームである。この日は、保育者がイラストと文字で示した「苔」「木の枝」「松ぼっくり」「石」「かたつむりの殻」など10の自然素材を、10個のくぼみがある卵の空パックに集めてくるという活動を、2人1組で楽しんでいた。自然フィールドにおいては、仲間と協力し合いながら自然と親しむことを目的として、午前中にこのような短時間のアクティビティを行うことが多いとのことだった。ネイチャービンゴを楽しんだ後は自由遊びの時間となり、子どもたちは、森に設置されたブランコやロープを使って思い思いに遊んでいた。

昼食後は、3歳の子どもは保育室の隣室で1時間ほど午睡をするが、3歳半以上の子どもは引き続き庭で遊ぶ。午睡をさせるかどうかは、保護者と相談して決めるそうである。午後1時半ごろには室内に入り、絵本の読み聞かせを

【写真5 ネイチャービンゴの説明を聞く子どもたち】





きいたり、ミニゲームをしたりする。午後2時ごろにおやつとしてカットした果物とマーガリンを塗ったパンを食べ、午後2時半にバスに乗車して、市内の園舎へ戻った。

### 3. 3. 3 その他の特徴

園が自治体に提出する学習計画には3ヶ月ごとに学習テーマが定められており、子どもたちの行うアクティビティもテーマに沿ったものが選ばれている。訪問した月の学習テーマは「自然と自然現象（自然科学）」であり、この日はクモやムカデなど「もぞもぞ動く生き物」に焦点を当てた絵本の読み聞かせや手遊びを行っていた。レジオ・エミリアの影響を受けた幼児教育を行っており、市内の園舎内にも自然フィールドに立つ施設内にも、ミツバチや TENTUMシの絵など、自然の生き物をテーマとして子どもたちが描いた絵画が数多く掲示されている（写真6）。

この園には乳児クラスと幼児クラスの両方が設置されているが、乳児クラスから上の幼児クラスへ移動するのは、概ね2歳7か月になる頃だそうで、遅くとも2歳10か月までには移動する。6歳児は5月1日に卒園となるが、小学校入学直前の9月から5月の期間には、就学前準備教育の時間を週2回（水・木）設けて、学校教育にスムーズに適應できるように配慮しているとのことである。

【写真6 掲示されたTENTUMシの絵】



## 3. 4 森と音楽のようちえん 松ぼっくり

### 3. 4. 1 園の概要

- 所在地 : Folehavevej 2970 Hørsholm, Denmark
- 地域の特徴 : コペンハーゲン中心地から電車とバスで1時間10分程度
- 園の設立年 : 1989年（当初はシュタイナー園として開園したが、現在の保育内容は異なる）
- 園児数 : 3歳から6歳までの子ども27名（3歳児9名、4歳児9名、5歳児9名）
- 学級数 : 1クラス（異年齢混合）
- 職員数 : 計5名 管理職（園長）含む  
有資格者（Pedagog）4名、保育補助（学生）（Pedagog Assistent）1名
- 保育時間 : 午前8時から午後4時
- 月額保育料 : 1,500デンマーククローナ
- 訪問日時 : 2022年9月2日（金）10:00~14:30
- ホームページ : <https://koglernes.horsholm.dk/>

### 3. 4. 2 実践の概要

郊外のフアスホルムという町にある独立法人立の森のようちえんである。子どもたちは朝8時から9時の間に拠点となる園舎に登園し、軽い朝食を食べてから10時ごろに森へ向かう。この地方の古い民家と馬小屋だった2つの建物を、森林自然局から借り受けて園舎として利用している。園舎に隣接して、簡易なブランコや砂場などがある園庭が設置されており、幼児向けの自転車などの遊具もある。毎日、ほとんどの時間を森で過ごすため、園舎内は簡素な作りだが、絵本やレゴブロックなどのおもちゃが置かれているほか、鳥の剥製や生き物のイラストなど、子どもが自然の動植物について学ぶための展示・掲示物が豊富に置かれている。

園舎から15分ほど歩いた森の中にYMCAのスカウトが所有する丸太小屋がある。子どもたちはいつもリュックを背負ってこの丸太小屋まで歩き、周辺の森で遊んでいる。丸太小屋には電気や水道はないが薪ストーブがあり、小屋の前にはタープも張ってあることから、暑さ寒さや雨風を凌ぐことができ、雷など緊急時の避難場所としても適している（写真7）。小屋に着くと荷物を下ろし、輪になって「朝の会」のような集団活動の時間がはじまる。お名前呼びの歌を歌い、歌に合わせて踊りながら動物のなりきり遊びをしたり、手遊びを行ったりする。この園では、朝、昼、帰りなど、活動の節目に歌や踊りが取り入れられている。多くはデンマークの伝統的な歌であるが、シュタイナー園だったときの名残りもあるようだ。

【写真7 拠点の丸太小屋とタープ】



## 【写真8 フィールドの樹木や遊具の様子】



「朝の会」が終わると自由遊びがはじまる。丸太小屋の周辺には、砂場や木製の固定遊具、ターザンロープやブランコなどが設置された、やや起伏のある広い庭があり、周辺の国有林との境界には柵が設置されている（写真8）。子どもたちは柵内の庭で、スコップやポーターなどを使って砂遊びをしたり、木登りを楽しんだりしていた。保育者は、子どもの遊びを見守っていることが多いようで、子ども同士のトラブル等についても、子ども双方から話を聞けるが、基本的には自分たちで解決することができるよう声をかけるにとどめている。

12時過ぎに、感謝の歌を歌ってから、木陰のテーブルで持参したお弁当を食べる。午後もう少し遊んだあと、1時過ぎ頃から保育者がたき火パンを焼く準備を始める。たき火の上で大きな鉄板を熱し、その上に油を敷いて生地を焼くタイプのたき火パンで、遊びに満足してたき火の周りに集まってきた子どもから順番に生地を渡して捏ねさせていた。たき火パンを食べ終わると、14時20分に点呼を行い、さよならの歌を歌ってから、園舎に戻る。

## 3. 4. 3 その他の特徴

もともと保護者グループの主導によって設立された独立法人のようちえんであるため、日常の園運営に保護者が関与する機会が多い。自治体からの補助金は月7,000デンマーククローナであるが、潤沢とはいえないため、保護者の有志によって構成される協議会（association）がバザーなどを開催し、その利益を運営資金に充てるなどしている。また、園舎周辺の清掃や整備、遊具の修繕などについても、年2回の勤務日を設けて、保護者が分担して行っている。基本的にはフアスホルムに住む子どもを優先的に入園させているが、他の自治体から入園してくる子もいる。上記のように、親が運営に協力することを求める園なので、入園前の保護者への十分な説明が必要である。

自然の中での生命の循環について、子どもに伝えることを重視しており、森で見かける動物の死骸を観察することもあるという。動物の死体を微生物や虫が分解していく過程を子どもに見せるために、丸太小屋近くに死んだ鹿の頭部を金網で囲って置いてあるエリアがあった。

## 4. 考察

## 4. 1 デンマークの森のようちえんの視察調査から

以上のように、デンマーク国内の4箇所の園へのフィールドワークを実施したが、ひとくちに「森のようちえん」といっても、その運営形態や園舎と“森”の位置関係も多様であり、なにより森で過ごす目的と実際の過ごし方には様々な方針が並列しているため、どのような観点から分類するののかによっても整理のしかたが異なる。自然環境を重要な保育環境として「遊び」のスペースの環境構成に特色を持たせている点は共通しているが、その具体的な“場”の設定は大きく異なることが確認された。

園舎と園庭である森との位置関係で分類するなら、一日中隣接した自然の森の中で過ごすことが基本で、ランチボックスを持参し、午後まで森で過ごすことが日課となっている「森で過ごすタイプ」と、多くの保育時間は園舎内もしくは園庭で過ごしつつ、時々森に出かけてたっぷり時間を過ごす「森に出張するタイプ」の間に、森に出て行く頻度によって様々な森のようちえんが存在している。また、園の敷地の中に森のような広い園庭があり、その敷地内のエリアで一定時間を過ごすタイプもある。さらに、森での過ごし方にも違いがあり、自然環境の中にいる条件を遊びのテーマとする「森遊び型」と園舎内や自宅での遊びの延長もみとめる「自由遊び型」の間に、どれだけ「森でなければ味わえない体験」を重視するかによる園の方針の違いが子どもたちの遊びの内容に反映している（表1）。

表1 参観した森のようちえんの分類

	森で過ごすタイプ	森に出張するタイプ	森のような園庭タイプ
森遊び型	松ぼっくり	マリエンダール	—
自由遊び型	ソーリョー森のようちえん	—	—
テーマ遊び型	—	—	BONSAIようちえん

デンマーク国内でも、コペンハーゲン市内のような都市部では「森のようちえん」人気が沸騰しており、妊娠がわ



かった時点で「森のようちえん」に入園の登録申請をするカップルが大勢いるという。高級住宅地でもあるフレデリクスベア市に園舎を置くマリエンダールのケースはそれに近く、バスをチャーターして森まで子どもたちと保育者が荷物を抱えて移動する様子は、さながら遠足のようにも見える。

一方、森でどんな遊びが展開されているのかという視点で見ると、一日のうちのスケジュールの中で“森”で過ごす時間とエリアが区切られ、シユタイナー教育の考え方に基づく活動を積極的に導入しているBONSAIようちえんのような園もあれば、ソーリョー森のようちえんのように、おもちゃの人形やフィギュアが森まで持ち込まれ、ママゴトなどに興じることも含めて子どもの自由に委ねる園もあった。そして、マリエンダールや松ぼっくりでの遊びのように、“森”に来ていることを最大限に生かそうとする保育方針に触れて感じたことは、森という自然空間が子どもの身体性や感性に与える教育効果は少なくないだろうということであった。

われわれの調査はたった一日ずつの参観だったので、森で遊ぶ子どもたちの人間関係に着目した分析はできなかったが、年齢グループに分けて交代制で森へ出張するマリエンダールタイプと、年齢を問わずみんなで終日森で過ごしている松ぼっくりタイプの園とでは、森での遊びの内容と子ども同士の関係づくりにも違いがあるのではないかと予想された。

#### 4. 2 「子どもと自然センター」での調査から

コペンハーゲン大学内にある「子どもと自然センター(Center for Børn og Natur)」に取材に行き、センター長のソーアン・プラストホルム教授ほか、デンマーク国内の保育士養成に携わっておられる専門職大学の二人の先生方から、子どもの育ちと自然の関係についてのレクチャーをうけた後に情報交換の機会を得た。

コペンハーゲン大学を含む4つの大学及び専門職大学と、野外活動協議会(Friluftsrådet)及びデンマーク自然保全協会(Denmarks Naturfredningsforening)が連携して、子どもの育ちに自然がどのような影響を与えるのか調査を行い、保護者や保育者、教師などへ知見を広めていくために「子どもと自然センター」が設立されたとのことである。聞き取りの際に紹介された同センターの調査によれば、デンマークの森のようちえんは、1992年にはわずか66園であったが、2003年には400-500園を超え、2018年には671園まで増加した。これはデンマークの就学前施設の約30%にあたる。ちなみに、この調査における「森のようちえん」(インタビューでは「自然ようちえん」Nature Kindergartenという呼称であった)の定義は、「年間を通して毎日平均3-5時間を屋外で過ごす園」である。「屋外」の中には園庭なども含まれており、また森のようちえんを名乗るかどうかについては「自称」でよいことから、実際にはかなり多様な「森のようちえん」が存在することが推測される。

デンマークでは森のようちえんにかぎらず、一般の幼児教育施設でも子どもたちが屋外で過ごす時間は総じて長く、同センターによる2,500人の子どもの保護者を対象とした調査では、年間を通じて平均3-3.5時間を屋外で過ごしていることが明らかになった。しかし、同センターでは、屋外で過ごす時間の長さだけでなく、屋外で行う活動の「質」が重要であると考えており、“Come Out Project”というプロジェクトを通して、保護者や保育士、大学の学生などに対して、自然の中で過ごすことの意義についてパンフレットや動画で伝えている。このプロジェクトの一環として、優れた自然体験の実践を行っている37の保育施設をlighthouse(灯台の意)として認定し、HPで実践の共有を行っている。今回訪問した園のうち、ソーリョー森のようちえん、ボンサイ、松ぼっくりはlighthouse認定を受けている園であった。

また、幼児教育施設における自然体験の質を充実させていくためには、保育士や教員になる学生の教育も重要であるため、コペンハーゲン専門職大学の保育者養成課程のカリキュラムには、カヌーやキャンプ、屋外調理などの自然体験が取り入れられている。モジュールのうち10週間は屋外で過ごすとのことで、このように自然体験活動を長期に取り入れる教育課程はデンマークでも珍しいそうである。学生が実際に体験することを通して、幼児教育施設において幼児がその活動を行う意味を考えさせることを重視しており、持続可能な発展のための教育(ESD)の視点を取り入れた保育者養成を行っているとのことであった。デンマークにおいても、子どもが自然の中で過ごす機会が年々減っていることへの危機感がある。センターの先生方によれば、親の世代であっても、必ずしも自然経験を豊かに持つ割合が多くないことがその背景の一つとして挙げられている。つまり、豊かな自然経験を持つ世代は「祖父母の世代」にさかのぼることになり、その状況は今日の日本の状況と重なるところがあるだろう。

調査を通して、子どもが自然と接触する機会が減少していることに対する危機感を、大学などの教育機関と自然保護や野外活動の関連団体が共有し、家庭や幼児教育施設における自然体験の「質」を高めていくための取組を連携して行っていることがわかった。わが国においても、今後見込まれる自然保育や森のようちえんの量的拡大に伴って、こうした質保証の取組を連携して進めることは重要であるといえる。



## 5. おわりに

本研究では、デンマークの森のようちえんの全体像を把握するためのフィールドワークを行い、本稿においてそのアウトラインを示したが、日本における森のようちえんが今後広がっていく中で、量的拡大以上に質的な充実が求められることを想定しての予備的調査であった。

今回のフィールドワークを通して「森のようちえん」というあり方について、グループの研究メンバー同士での議論の中でいくつかの問いが生まれた。森に出かけることの意義、森の中で育まれるもの、「森のようちえん」と名づけることの意義など、あらためて検討する必要があるという課題意識が生まれた。そして、日本国内で自然保育ないし「やま保育」に取り組んでいる先進事例の中には、デンマークの森のようちえんに負けずとも劣らぬ貴重な実践があるのではないかと考えるに至った。今後は日本の「森のようちえん」の現状とその特徴に着目し、より詳細な調査を進めていくことが重要であるといえる。

## 注

- 1) 「森のようちえん」とは、森のようちえん全国ネットワーク連盟の定義によれば、「自然体験活動を基軸にした子育て・保育、乳児・幼少期教育の総称」である。森のようちえん全国ネットワーク連盟のホームページ <https://morinoyouchien.org/about-morinoyouchien> を参照のこと（2023年1月30日最終アクセス）。
- 2) 野外活動協議会（Friluftsrådet）の活動についてはホームページ <https://friluftsradet.dk> を参照した（2023年1月30日最終アクセス）。
- 3) グリーンスプラウト（Grønne Spiers）による森のようちえんの認証基準についてはホームページ <https://groennespirer.dk> を参照した（2023年1月30日最終アクセス）。
- 4) プロジェクトの詳細については、「子どもと自然センター」のホームページ <https://centerforboernognatur.dk> にも掲載されている（2023年1月30日最終アクセス）。
- 5) 「子どもと自然センター」よりLighthouse認定を受けている施設の一覧については、以下のURL <https://centerforboernognatur.dk/projekter/kom-med-ud/fyrtaarnsinstitutioner/> に掲載されている（2023年1月30日最終アクセス）。

## 引用・参考文献

- (1) 山口美和（2016）「「森のようちえん」をめぐるポリテイクー「信州型自然保育」検討委員会の議事録分析を通して一」『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室 研究室紀要』第42号，pp.215-225
- (2) 杉山浩之（2015）「森のようちえんの現状と課題—デンマーク・ドイツ・スイス・韓国における事例を中心に—」『広島文教女子大学紀要』第50号，pp.1-19
- (3) 松田こずえ（2019）「ノルウェーの保育における自然環境と持続可能な開発—1996年から2017年までのナショナルカリキュラムの変遷に着目して—」『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』第7号，pp.57-66
- (4) 光橋翠（2020）「スウェーデン「森のムッレ教室」におけるコモンスの世界観」『お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学論叢』第23号，pp.121-130
- (5) 柴田卓・柴田千賀子（2022）「フィンランド・デンマークの自然を活かした保育に関する研究」『自然保育学研究』第4巻第1号，pp.1-13

## 付記

\* 本稿は、2021～2024年度科学研究費・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)「北欧諸国と日本のへき地教育における自己調整的な学びと教師教育のパスペクティブ」(課題番号21KK0036)(研究代表者:伏木久始)及び2020年度～2024年度科学研究費・基盤研究(B)(一般)「自然保育認定・認証制度の影響と効果に関する実証的研究」(課題番号20H01655)(研究代表者:山口美和)による研究成果の一部である。

# Characteristics of the Danish Forest kindergartens

Miwa YAMAGUCHI\* · Hisashi FUSEGI\*\* · Tetsuhito SAKATA\*\*\*

## ABSTRACT

This study examined the characteristics of forest kindergartens in Denmark and the role these kindergartens play in developing children in their early years.

Interviews were conducted at the Centre for Children and Nature at the University of Copenhagen and four different types of forest kindergartens in Denmark were visited between August and September 2022.

The Centre for Children and Nature reported that children in Denmark spend a relatively long time outdoors (3-3.5 hours) each day but admitted that the 'quality' of the natural experiences they have outdoors has not been sufficiently assessed.

The observations of the different forest kindergartens revealed that there were a wide variety of forest kindergarten forms. For example, some kindergarten buildings are forest adjacent or within walking distance of a rich natural setting, whereas children in kindergartens in urban areas need to travel a long distance by bus to a forest far from the kindergarten. The observation visits confirmed that although the conditions for spending time in the forest are the same, the activities the children did in the forest differed depending on the different policies of the different kindergartens.

This study revealed the areas to consider when Japan wishes to enhance its nature-based childcare.

### Key words

Forest kindergarten, Denmark, nature experience, child-centered childcare, teacher education in early childhood education